Studies of Taiwan Aborigines

Vol.3／1998

CONTENTS

Articles

Exploitation of the Mountain Districts in Formosa and Aiyu-Sen (boundary lines against aborigines). KOKUBU Naoichi 3

The Ephemerality of Ethnic Identity: Neither Han, nor Siraya (1) YAMAJI Katsuhiko 15

INO Kanori and his Research Activities in Taiwan, 1895-1906. KASAHARA Masaharu 54

Who are the Yami? A view from the Philippine Data. MORIGUCHI Tsunekazu 79

Cognition of Space among the Ami in Taiwan. HARA Eiko 109

Austronesian in Taiwan who wear their hair in queues. KOBAYASI Gakuji 128

Study Notes / Research Notes

Describing an Accident: on the Complexity of the Causality of Misfortune among the Puyuma. TAKOSHIMA Sunao 158

A Consideration on the Notation of the Ethnic Group "Saisyat". CHEN Wen-lin 178

Camels, grapes, and hypocrites. TSUCHIDA Shigeru 197

The Edible Plants among the Nanshih Amis. NAGASAWA Toshiaki 203

A Note on OKADA, Shinko's Report of Investigation on the Tsou. MIYAOKA Maoko 218

Ihsii Shinji and J. G. Frazer: A Sketch of an Encounter between Taiwan Aborigines Studies and British Anthropology. YAMADA Hitoshi 230

An Episode in the historical study of the Taiwan Aborigines : Kaneko Shohei's notes on Animal Folklore. HSU Chin-fa 246

Contemporary Politics between different Ethnic Groups in Taiwan. ISHIMARU Masakuni 254

The Taiwan Aborigines: Research and Material Culture Collections in Mainland China. SUO Wen-qing 268

English Index of the Siraya Vocabulary by Van der Vlis. TSUCHIDA Shigeru 281

Essays / Book Reviews

Edited by

Shung Ye Taiwan Aborigines Research Group in Japan

定価（本体2000円＋税） 風響社

ISBN4-938718-97-9 C3339 ¥2000E

●台湾原住民研究3

1998 / Vol.3

日本順益台湾原住民研究会編

風響社

台湾原住民研究

第3号

論　文

台湾山地開発と隘勇隊（防衛線） …… 國分　直一　3

蜉蝣の認同、祖先からの出奔——漢族でもなく、シラヤ族でもなく(1) 山路　勝彦　15

伊能嘉矩の時代——台湾原住民初期研究史への測鉛 …… 笠原　政治　54

「ヤミ族とは何処の部族なる乎」——フィリピン側の資料に基づいたヤミ族 …… 森口　恒一　79

台湾アミ族の空間認識 …… 原　英子　109

台湾原住民の辮髪 …… 小林　岳二　128

研究ノート・資料

事件を記述する——プユマ族の災因論の多面性をめぐって …… 蛸島　直　158

「サイシヤット」の民族名称に関する一考察 …… 陳　文　玲　178

「駱駝、葡萄、偽善者」 …… 土田　滋　197

南勢アミの食用資源植物 …… 長沢　利明　203

岡田信興〈阿里山蕃調査書〉を読む …… 宮岡真央子　218

石井眞二とJ・G・フレイザー——台湾原住民研究とイギリス人類学の出会い　素描 …… 山田　仁史　230

台湾原住民研究史のエピソード——動物民俗研究者金子総平 …… 許　進　発　246

今日における台湾の民族を巡る政治について …… 石丸　雅邦　254

中国大陸における台湾原住民の研究と所蔵文物 …… 索　文　清　268

English Index of the Siraya Vocabulary by Van der Vlis …… 土田　滋　281

短信・書評

呪医シカワサイの序列と組織への強調（原英子）311／幻の原住民博物館（長沢利明）313／サイシャット族の村の風景から（中西裕二）315 ……

日本順益台湾原住民研究会編
1998

聞社：東京）
鳥居龍蔵（楊南郡［譯註］）
1996　『探險台灣――鳥居龍蔵的台灣人類學之旅』442pp.、遠流出版：台北
Tylor, Edward Burnett
1881　*Anthropology : An Introduction to the Study of Man and Civilization*, London : Murray.
鷲巣生
1937　「理蕃四十年史話（四）」『理蕃の友』6(4):5-6
山口敏
1988　「坪井正五郎――総合人類学の先覚者」『文化人類学群像〈3〉日本編』（綾部恒雄［編］）9-23、アカデミア出版会：京都
矢野暢
1979　『日本の南洋史観』222pp.、中央公論社［中公新書］：東京
楊南郡
1996a　「學術探險家伊能嘉矩」『台灣踏査日記（上・下）』（伊能嘉矩＼楊南郡［譯註］）上:5-32、遠流出版：台北
1996b　「〈南遊日乗〉解題」『台灣踏査日記（上・下）』（伊能嘉矩＼楊南郡［譯註］）下:357-358、遠流出版：台北
執筆者不詳
1925　「臺灣史學の權威・伊能嘉矩君の追悼會」『臺灣時報』73:50-51

台湾原住民研究第3号
1998年12月20日

「ヤミ族とは何処の部族なる乎」

フィリピン側の資料に基づいたヤミ族

森口　恒一

Ⅰ．ヤミ族の由来

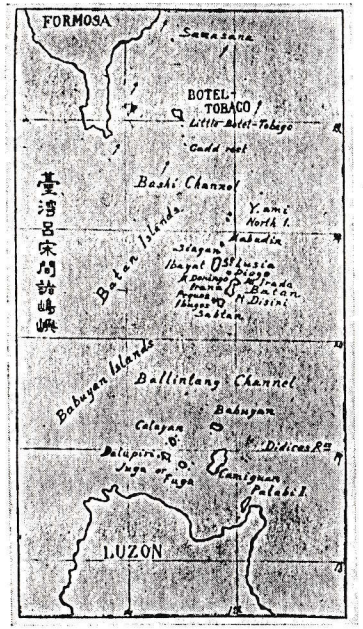
「ヤミ族」、この名前は、台湾原住民のことを少しでも知っている人は、必ず知っている良く知られている部族名である。ヤミ族の居住地は台湾本島の東南に位置する蘭嶼である。この蘭嶼は、古い中国文献や日本時代の地名として紅頭嶼として、そして、世界的にはBotel Tobagoとして知られている。この「ヤミ族」という名は、日本人で最初にこの島の学術調査を行った鳥居龍蔵が彼の報告の中で命名したものである。この名称が現在問題になっている。

彼は、「紅頭嶼通信」（鳥居（1898a））では、

> 彼等は紅頭嶼に於ける各部落をよぶに左（下記）[1]の名称を以ていたし居り候。
> （一）　Imoród nāmén.　　佐野村
> （二）　Ivarinu nāmén.　　東丘村
> （中略）
> また、彼等は、自分等を呼ぶに如何なる名称を附し居り候や、この疑問について小生は、未だ断言はいたし難く候へども、彼等のつねに口にする所を以てせば、蓋しYamiと申し居るが如くに御座候。もしこの「ヤミ」なる名称にして果たして彼等土人の名称なりとせば、彼等土人を呼ぶに「ヤミ」種族と申してよろしく御座候。

[1]オリジナルは、縦書き。

地図１



A

B

また、鳥居（1898b）では、

紅頭嶼土人ハ其ノ島嶼ヲ称シテやみかみト云フ。かみトハ「國」ト云ヘル儀ニシテ「やみノ國」ト称セリ

一方、同様の見解が鳥居（1899）でも示されている：

台湾本島南端ノ東方ニアタリテ一島アリ。紅頭嶼ト称ス。支那人ハ此ノ名ヲ「アンタウスウ」ト発音シ、欧米人ハ此ノ島ヲ「ボテルトバゴ」ト呼ベリ。土人自身ハ「ヤミカミ」ヲ以テ此ノ地ノ名トセリ。「カミ」トハ国ノ意、「ヤミカミ」ハ即チ「ヤミ」国ナリ。

また、これに付随する台湾及び紅頭嶼の地図には、

YAMI-KAMI

or

YAMI-NAHMEN

とある。（地図１を参照）

この後、種々の調査が行われたが、移川（1931）では、

（略）此島の蕃人を一般にYami族と呼んでゐるがYamiと云ふ稱呼は日本人の附したる名の由で、自らは、Tautauと云ひ紅頭嶼をPonso（Pongso） no Tauと云つてゐる。Ponso（Pongso）[2]は、島、Tauは人の義である。

とあるし、阿倍（1937）では

（略）彼等は、紅頭嶼をヤミカミと稱するはヤミの國の義であるといふ。一説にはヤミとは日本人のつけた呼稱で、自らはタウタウ（自分等人々）と稱し、紅頭嶼をポンソノタウ（自分等住民の島の意）と稱してゐるということである。

とある。

以上のように彼等自身は、自分たちをTao（人）または、Taotao（人々、複数形）と呼んでいる。自分たちの仲間以外との外界との接触がなかった時には、「お前達は、何だ。」と問われれば、小さい単位の村の名、島の名、関係社会での名称、そして、俺達は、人だという答えになる。その答えが、鳥居が書いている色々な名称として表れてくる。

外の者がその部族の自称以外の呼称を使うのは、世界的にも良く知られていることで、台湾の中でも「我は、人なり」と答えたおかげで、それがその部族の名称となったことは有名で、Bunun族、Tsou族、Thao族、Sedig族などがその良い例である。また、現在の「ヤミ」族の人達は、外部の人につけられた名称をやめ、自分達を「タオ」（Tao）族と呼ぼうとしている[3]。

一方、戦後、馬淵（1954）においてこの部族について書いている。馬淵は、「やみかみ」

[2] ponso → pongso [poŋso]

[3]「人」のことを、タオで表す言語は、特にフィリピン側では多い。たとえば、タガログ語、ビコル語、イロカノ語など。

を“吾々ヤミ”と解釈し、それに北の意味を付し、南のバタン側との関係を考えている。ただ、そこでは実際のデーターに基づく論証ではなく、推論であった。

Ⅱ．ヨーロッパ人の見た蘭嶼

蘭嶼は、世界的にはBotel TobagoやTabaco Xima等で知られている。また、地図上では、1650年の地図に島の記載はあるが名前はない。（W.J.Nlaeu: Imperii Sinarvum nova 'descriptio）、1654年（Sanson d'Abbeville: Les Isles Philippines, Molucques et de Ia Sonde）にTabaco Ximaと1726年（Valentine: Kaart van het Eyland Formosa en de Eylanden van Piscadores）には't Eyl, Groot Tabacoとある。これらの資料から日本の地図にもタバコ島という名が使われている。一方、Botelいう名前は、1720年以降から使われ始めたようで、Botrol（Herman Moll: A Map of the East-Indies and the adjacent Countries.）、Bottol（Jan. Bt. ELwe: 2 Partiede la nouvell grande Carte des Indes Orientales）とあり、1805年にはBotel Tobago（W. R. Broughton: Neue Carte von der Nordost-Küste von Asien und den Japanischen Inseln.）[4]

所で、この島に居住する人達についての記述は、どうであったのであろうか。オランダ人よる『バタヴィア城日誌』（村上（中村）、1972）の1644年4月20日以降に数カ所に簡単に記載されているが、その記述には原住民という名は存在するが、彼等については何も言及していない。一方、中国、台湾側からの詳しい記述は中国側の文献として数カ所で言及されてはいるが、本格的なものは、鳥居龍蔵の学術的な調査を待つしかないが、フィリピン側から見た資料が少なからず存在する。

フィリピン側の資料は、基本的にはこの「ヤミ」族が言語学的に属するバタン諸島、バブヤン諸島の記述の中にあらわれるものである。フィリピン北部の古い記述としては、イギリスの海賊のDampier（1697）のものがあるが、これは、航海の道筋を地理的に示したもので、イトバヤット島あたりまで行って、その後は南下してしまっていて「ヤミ族」や蘭嶼の記述はない。

また、バタネス、バブヤンの住民については、キリスト教に改宗させられ、スペイン人達の命令に従って信者達をバシー海峡の島々やルソン島に強制移住させていたという記録は、Dampierが訪比した少し以前のスペイン人宣教師の1686年の記録からあり、1720年の

[4] Asai（1936）などによる。

ものでは、バタン諸島の人々をカラヤン島に移したと報告している[5]。このような状態では、すべてのバタン島住民がスペイン人のキリスト教徒に盲従するわけはなく、海洋民族としてカヌーを使って移住することに慣れている人達は、戦うか、それとも、自分たちの自由になる新天地に船出しようとするのは当たり前の事であったでろう。このことに気がついたのがBlumetrittであった。彼は、この推測からBlumentritt（1898）で、ドミニック派の宣教師の報告を元にバタン島とバブヤン島について論じ、その中に蘭嶼の住民は、バタネス島、バブヤン島からの移民であろうとしている。また、その他には、Idigoras（1896）には、スペインの軍艦が紅頭嶼に行き、そこの住民の言葉が、古イトバヤット語であると述べている。

前述のDampierは、ルソン島の北の5つの島を見い出し、それぞれに名前を付けた。それらは、オレンジ島（Orange）、グラフトン島（Grafton）、マンモス島（Manmouth）、バシー島（Bashee）、ゴート島（Goat）であった。現在の名前では、オレンジ島はイトバヤット島、グラフトン島は、バタン島、マンモス島は、サブタン島、バシー島は、イブホス島、そして、ゴート島は、ドゥクイ島であろうと考えられる。その中でオレンジ島は外から見ると絶壁で、住民がいないように見える無人島であるとしている。しかし、イトバヤット島は、一回でも行ったことがある人ならば、今でも回りの海からは、断崖絶壁だけが見えるだけで、周囲を壁で囲まれた要塞のようで、浜辺は、全くない。その上、海にもそれほどの人がいないので、無人島と思うかもしれない。だが、この時代の古い記録では、イトバヤットの人から色々スペイン人に訴えたことがあったということが記録されているので、その島は、明らかにDampier到着時でも無人島ではなかった。

残念ながらDampier達は、台風などのために、ルコニア島（Babuyan）近海の島々を通り、南下しバシー地域から離れていった。そのために、北の蘭嶼の地域まで行っていないので、ヤミに関しての記述はない。

一方、最近イトバヤットに行くと今までに聞いたことのない名称で、蘭嶼のことを呼んでいる。今まで我々が聞いていたイトバヤット語の蘭嶼の呼称は、Di Hami で、それがこのグループの一番北の人が居住する島の名前であった。ところが、最近では、イララ（Irala）という名称を時々耳にする。現地の人に聞いてみると、これは、Benedekが蘭嶼の研究調査後、イトバヤットの研究をしている時に、彼が使っていたと言われている。彼のこの島へ

[5] Gonzales（1966）

の訪問以前にはそのような名前は、存在していなかった。と言っても、台湾側でもこの名称は、蘭嶼のそれまでの研究でも、見いだせないものである。この名前が文献として現れるのはBenedek（1987）が最初であろう。これ以前は、伝統的な名前以外は蘭嶼でも、イトバヤットでも、バタネスでも耳にしなかった。彼は、蘭嶼のことをBenedek（1987）の中でイララ（Irala）呼んでいる。

このイララという単語は、i-ralaと分解され、他のこのグループに属する言語では、i-rayaとなり、その意味は、「海岸から舟を持ち上げる」、「陸地」、「海岸」という意味で、「海」または「沖」の“ilaud”と対立する単語である[6]。 海に対する陸という意味である。この表現の仕方は海に対する「島」を「土、陸」の意味の“tana”と呼ぶ場合があり、このことと全く同じなのである。すなわち、pongso＝島の替わりなのである。

これに関して、馬淵（1954）で興味深い報告がある。次のようなものである。

> 台湾からの来航者や他の未知の国からの来航者が単に tau du ilaud（沖の国の人、海の彼方の人）と称せられる。.....

この中には、他国の人間には、“ilaud”という名前がある。しかし、彼等自身の名称には何も言及はしていない。また、南の島々では、海を“idaud” 陸または海岸を“iraya”と呼んでいる。やはりBenedekが無理に作り上げたようにも思われる。

所で、イララという名前は、固有名詞としてバシー文化の重要な単語である。このイララは、蘭嶼以外の南の方ではイラヤであり、少なくとも２カ所にその名前がある。イトバヤット語、イヴァタン語、バブヤン語では、大文字で書くIrayaは、山の名前でその一つは、バブヤン島に、もう一つはバタン島にある。それは、その島の山、それも最高峰をすべてこの名前で呼んでいる[7]。それゆえこの名称は、バシー文化圏にある最高峰の共通名称で、蘭嶼の固有名称ではないと考えられる。また、この名前は、彼が長い間滞在した蘭嶼とイトバヤットにだけ見られる名前であり、このことが如実にこの名前の由来を示している。

外部の人達の圧力で命名されたヤミ族を排除し、蘭嶼の原住民達は、自分たちの命名に

[6] Itbayat語 ： iraya，ilaud、Ivatan語、Babuyan語：iraya，idaud，
Yami語 ： irala，ilaud

[7] イトバヤット語やバブヤン語では、固有名詞のイラヤは、山の名前で、makarayaは、動詞で「舟を海岸にあげる」という意味である。

よる新しい名前を持とうとしていて、そのような運動の一環で出てきた名前かもしれない。最近公けになっているのはタオ族という名前である。（そうなるとフィリピンの大部分がタオ族になる。）

Ⅲ．「ヤミカミ」とは何語成る乎。

所で、鳥居の報告の中の紅頭嶼に居住する人達の部族名またはそれと関連する名称は以下の通りである。

鳥居（1898a）　yami
鳥居（1898b）　やみかみ、やみ＝？、かみ＝國　：　やみノ國
鳥居（1899）　ヤミカミ、YAMI-KAMI，YAMI-NAHMEN
移川（1931）　自分等：Tautau、島：ponso（pongso）　no tao
安倍（1937）　自分等人々：Tautau、ポンソノタオ：人の島

ヤミ族という名前の元となる資料としては、

（村の名）・ナーメン
Yami-nahmen
Yami-kami
ヤミ・カミ

の三単語、二文章だけである。また、NAHMENは、鳥居（1898a）ではnāménでナーメンとなっているが、実際の発音は、/namen/ [namən]である[8]。

ここで問題になるのは、これらの言葉が、蘭嶼の原住民の口から出る可能性があるかということである。言い換えれば、ヤミ語にあるかということである。前者のnamenは、属格または-Focusの形で、前者の文をそのまま解釈すれば、「我々のヤミ」（または、「我々のは、ヤミ」）となる。少し詳しく言うと、後者は、「我々（話し相手を含まない）の（村）は、

[8] e = [ə]

ヤミである。」ということになる。

そこで、まず問題になるのが“kami”という代名詞が存在するかどうかということである。“namen”、“kami”の両方の単語とも共通する語彙は、台湾、フィリピンの原住民の言語に一般的に見られるものである。namənは、色々な言語資料に当たっても必ず見つかる単語である。また、必ずヤミ語に関する文献にも多数出ている。一方、カミのほうが問題となる。あるヤミ語の資料にはこの“kami”という単語はないとしているが、実際のテキストには、数としては多くはないが見られる。たとえば、Benedek（1987）のp. 633には

na no palowaloinen kami no aleimey.
（it GEN float　　we　GEN wind）
（We were float drifting in the winds）

のように、明らかに“kami”という単語が使われている。確かに話し相手を含まない我々を言語調査で見つけ出すのは、なかなか難しい。しかも、蘭嶼の人達は、他の形式の代名詞を多用し、この形をなかなか使わない。忌み言葉でもあるのかもしれない。しかし、いずれにせよ現代のヤミ語に両方の代名詞があることは確かである。

一方、ヤミの方である。この単語は、“yami”、“i'ami”などと解釈できるが、イトバヤット語を除くこのバタニック諸語では、“i”＋“ami”と分割できる。“ami”という単語は、

イトバヤット語　hami　（i'hami）
イヴァタン語　'ami　（i'ami）

などとあり、この形は、イヴァタン語のものと一致し、意味は、「北風」または、「冬」、「寒い季節」という意味である。また、“i”というものは、「—から」とか「—のところ」または、「—島／村」というようなもの表す接頭辞である。すなわち、ヤミ全体としては、「北風島／北村」、「北風が来る方向の村」、または、「北島／北村」ということになる。以上の事実から「ヤミカミ」は、言語的にも解釈可能であるし、存在する。ということは、これは鳥居が作り出したのでは、なく実際に原住民が言って、それを鳥居が書き取った可能性は高い。また、形としてはイトバヤット語よりはイヴァタン語の方が近いようである。

Ⅳ．ヤミ族の地図上での位置

所で、地図上ではヤミ族の居住している島はどうなのであろうか。鳥居（1899）やScheerer（1906）、Bureau（1903）ではいくらかの移動はあるが、以下のようになっている。

鳥居（1899）	Scheerer（1906）	Bureau（1903）	面積
Botel Tobago	Botel Tobago	?	
Y'ami	Y'ami	Y'ami	（ 0.4 miles^2）
North	Norte	North	（ 0.4 miles^2）
Mabudis	Mabudis	Mabadis	（ 0.6 miles^2）
Siayan	Norte	Siayan	（ 0.2 miles^2）
Ibayat	Ibayat	Isbayat	（26　miles^2）
Diojo	Diego	Diego	（ 0.6 miles^2）
Batan	Batan	Batan	（24　miles^2）

となる。ところで、興味深いことは、明らかに原住民の地名ではないNorteという島があることである。過去のスペイン人宣教師の文献から見ると[9]

「その列島の主な島は、バサイ（Basay）またはバタン、サプタン（Saptan）とイトバヤットである。台湾に近いヤミア（Jamia）とノルテ（Norte）は、列島の最北端である。その他に取るに足りない島および無人島がある。それらは、シアヤン（Siayan）、ディオゴ（Diogo）、ミサンガ（Misanga）、デクウェス（Dequez）、マブディス（Mabudis）、とディアミス（rock）である。」

そして、さらに問題の島々については

[9] Scheerer（1906）

「(略)　主な島は、シアヤム（Siayam)、マブディス（Mabudis)、タネム（Tanem）マイサガ（Maysanga）とヤミ（Iami）である。最後のものを除いて島々は、バタン諸島から見ることができる。バタン人によると異教徒であるヴァシ（Vashi）民族が一番重要な島であるヤミ（Iami）島に住んでいる。(略）バタン列島の西北の住民とヴァシ諸島の住民には若干の共通語があるらしく、互いに話すことを聞き取る事が出来る。スペイン人の役人や宣教師は、一人もその諸島を訪れてはいない。」

一方、 Buzeta & Bravo (1850) 記述では、

「(一番北にある島々は)、シアヤン（Siayan)、ディトルカン（Ditorcan）[10]、ミサガ（Misanga）とマバディス（Mabadis）であり、それらは、小さかったり、価値がなかったりして記述するに足るものではない。これらのグループの先にディアミス（Diamis）という名の円錐形の岩礁（300 ヴァラス（1 vara=0. 835m）があり、その脇に偶然にも同じ名前のディアミ（Diami）という岩がある。さらにその北には、人が住んでいる豊かな島がある。その住民は、バタンの住民と敵対し、その名称はわからないが、嵐や潮流に流された時以外には、上陸することが許されず、その場合も海岸から奥には入らせない。」

以上の記述からわかることは、一番北の島に居住している似たような言葉を使う人達がいるということでる。しかし、その島の正確な位置を示しているものはない。この記録は多分原住民の人達からスペイン人が聞いた記録に基づくものであろう。また、上記の地図に出ているイトバヤットから北の島々の内、かろうじて人の住めるのは、イトバヤットに近いシアヤン島だけで、それも家畜の番をしているだけで居住はしていない。その他の島は、断崖絶壁で舟から上陸できないとか、まるで水が無く、上陸するためには水を携えていかなければならない所である。一方、現在多くの人が住んでいるイトバヤットですら最近になって水道設備が整い、水に苦労しなくなったが、かつては全島に行き渡るほどの水はなく、雨水を利用していたのである。それゆえ、イトバヤットから北のフィリピン側の島々は、長期に定住することが、不可能な島ばかりである。それに比べて、蘭嶼は、多く

[10] Ditarem の印刷ミスか？

の水に恵まれていて、しかも、海岸線も上陸しやすいところが数多い。

以上の事を考えてみると、「ヤミ」と地図上の“I'Ami”がずれているのではないかという疑問が出て来る。現在の我々は、公になっている地図を元にして考えているからこのずれがあるのかもしれないと推測される。そこで、原住民の人達は、北の島々をどう呼んでいるか考えてみる必要がある。

バタン島の人達は、北への関心は薄く、島の名前はせいぜいイトバヤットまでであるが、イトバヤットの人々は、非常に正確な知識がある。彼等による島の名前は地図２、３の通りである。

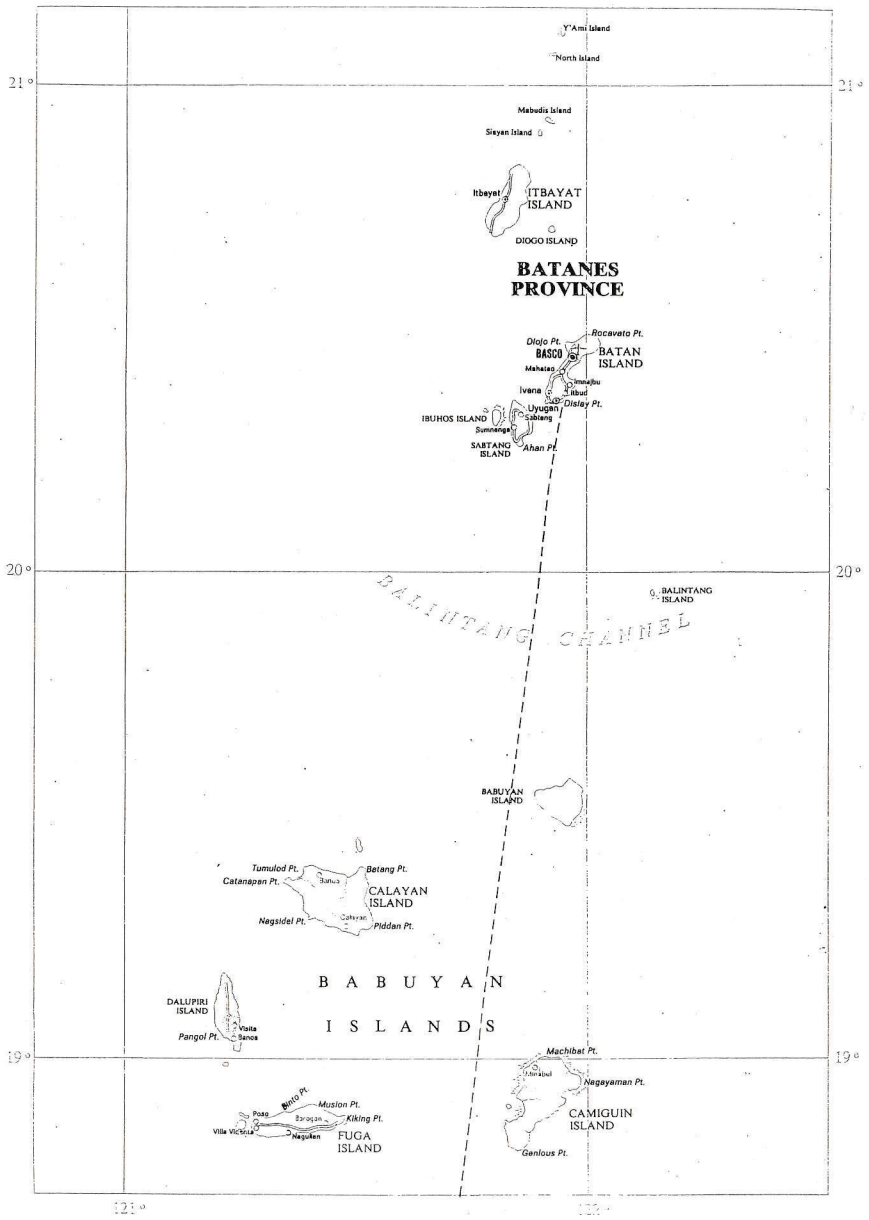
地図を比べて見てもわかるように、ディオホ（Diojo）／ディオゴ（Diogo）[11] というのは、バタン島の北部にある半島の名前で、ディオホ／ゴといわれているのは、ディヌム（Di'nem）であり、シアヤン（Siayan） の北の島は、マブディスまたはマバディスではなく、ディタルム（Ditarem)、ノース（North） は、ミサガ（Misanga)、そして、ヤミ（Y'ami）といわれているものがマヴォリス（Mavolis)、マヴディス（Mavudis）となり、その北の島がイハミ（I'Hami)、または、ヤミ（I'ami）となる。 表にすれば次のようになる。

一般の地図	現地の人の呼称	
	(ｲﾄﾊﾞﾔｯﾄ語)	(ｲｳﾞｧﾀﾝ語)
Botel	Tobago	I-Hami I'Ami
I'Ami	Mavulis	Mavudis
North	Misanga	Misanga
Mabudis	Ditarem	Ditarem
Siayan	Siayan	Siayan
Itbaya	Itbayat（Ichbayat）	Itbayat
Diojo/Diogo	Di'nem	Di'nem

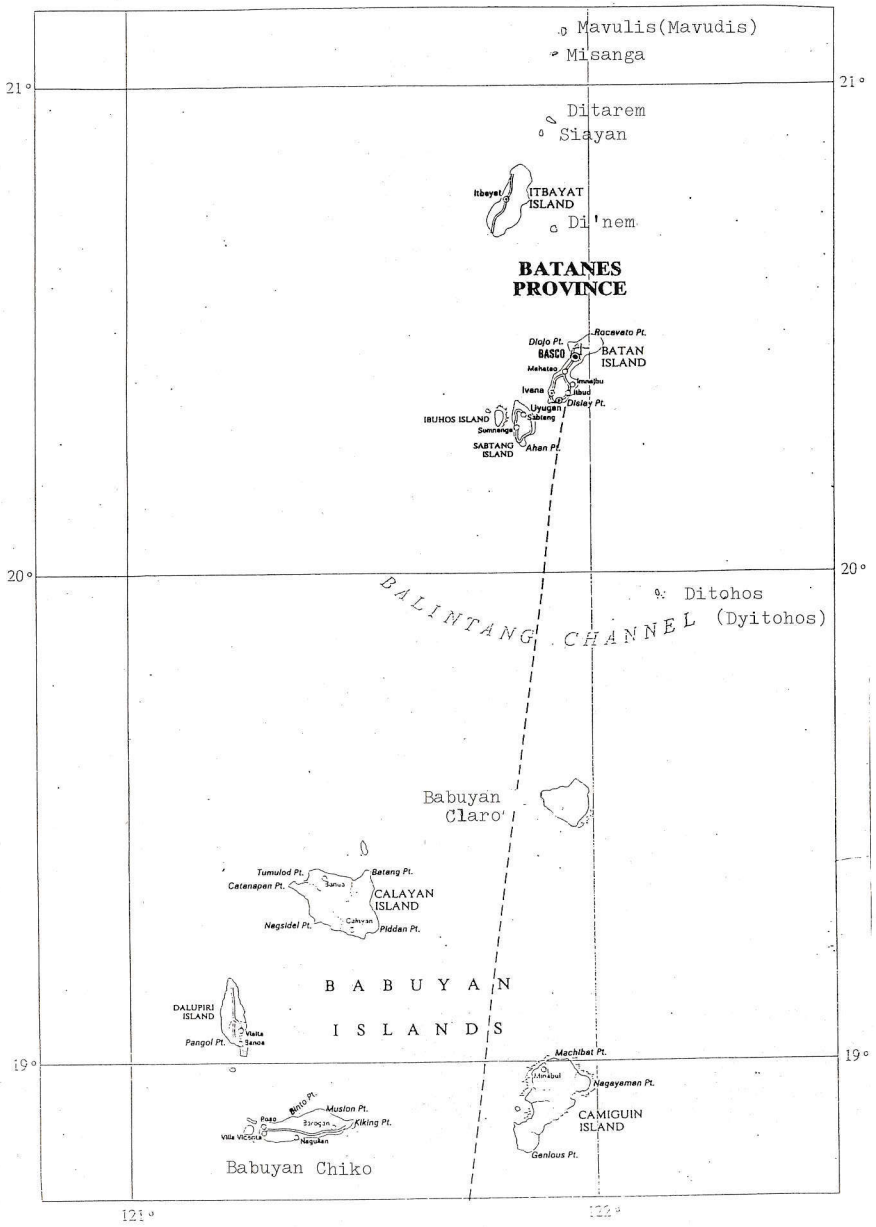
となり、明らかにスペイン人達の記録したものとは異なっている。確かにスペイン人達は、

[11] Diojo、Diogo をスペイン語読みをすると、“dioho”、“diogo” となり、前者はイヴァタン語の “di oho” と後者は、イトバヤット語の “di oxo”[oRo]から来たのかもしれない。この違いは、現在の地図の中に別の地点で Diogo、Diojo があることも、この言語の違いを反映している。“oho”、“ogo” とは、「頭」のことである。

地図：２現在のフィリピンの地図



地図：３イトバヤットの人達の知識



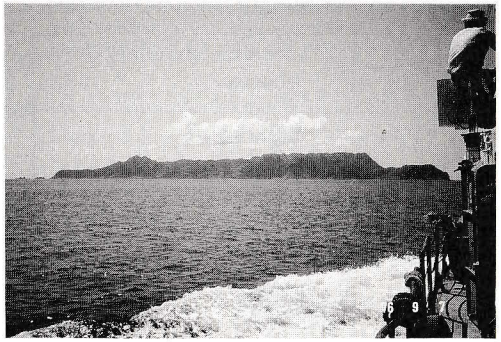


写真１：I'Ami

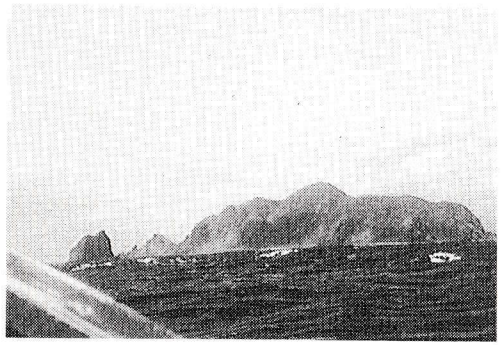


写真２：Mavulis

写真３：Mavulis, Misanga, Ditarem, Siayan

バタンに行って調査をしているが、全島を回ったわけではなく、バタン島から見た景観に基づいて記述しているようである。その証拠には、イトバヤット語のMavulisを使わずイヴァタン語のMavudisを使っていることからもわかる。

バタン島から北を望んだ時の位置関係は、以下のようである。

I'Ami

Mavulis

Misanga

Ditarem

Siayan

Itbayat

Di'nem

Batanes

のように、バタネスからは、Di'nem、Siayan、Ditarem、Mavulis（Mavudis）しか見ることができない。また、I Hami（I'Ami）は到底見ることが出来ない位置と距離のために[12]、一番端に見えるMavulis（mavudis）を一番北のI'Amiと間違い、Ditaremを２番目に来るはずのMavulis（Mavudis）と間違い、手前のDi'nemを半島の名前のDiojo[13]と間違えたのであろう。

写真４：Itbayat

写真５：Batanes

すなわち、イトバヤットの人達は、明らかに蘭嶼のことをI'Hamiと呼んでいることには間違いはない。現在無人島で壊れた国境の航路標識と山羊と山の動物だけが住んでいるフィリピンの最北端の島ではなく、その向こうの現在では台湾に属する人の住んでいる島がこの問題となっている島なのである。

Ⅴ．Vasayic 文化圏

ヤミという名称は、明らかにイトバヤット語ではなく、イヴァタン語またはヤミ語である。ところで、バシー海峡、バリンタン海峡、バブヤン海峡の台湾とフィリピンのルソン島との間にある島々は、一つの文化圏なしていることが地名から明白になる。また、この地域の地名は、ある一つを除いてすべてはっきりした意味を持っている。

Hami, I'ami	north wind, winter	（北風）
Mavulis, Mavudis	low	（低い）[14]

[12] 鹿野氏のことを書いた本の冒頭にはバシー海峡の島々がみえるように書いているが、実際には、地図を見てみれば不可能なことがわかるし、イトバヤットの人もバタンのに人もたとえ一番北の島へ行ったとしても肉眼で台湾側の島を見たことはないと言っているし、また、ヤミの方の人も南の島を肉眼では絶対にみることは出来ないと言っている。

[13] このことは、地図２を見るとわかることで、この中にはDiojoとDiogoの二つの地名が出ている。

[14] Mavilis、Misanga、Ditarem、Siayanは、すべて島の形状からその名前が付けられている。

Misanga	twig	(枝分かれ)
Ditarem	sharp	(鋭)
Siayan	separated	(分離)
Itbayat, Ichbayat	west	(西風、西)[15]
Di'nem	seven	(7)[16]
Ivatan	?	(Batanes)
Vasay	?	
Isamorong	other half	(あとの半分)
Mahatao	float	(浮いている)
Ivana	shore	(海岸)[17]
Uyugan	flow	(流れる)
Itbud	spring (water)	(泉)
Imnahbe	space underneath	(隠れた)
Sabtang	cross the sea/river	(海を越えた)
Ivuhos	plant name	(植物名)
Dekey	small	(小)
Ditohos, Dyitohos	high	(高い) (Balintang)[18]
Babuyan Claro	seen clearly	(良く見える所)[19]
Babuyan Chico	seen little	(少し見える所) (Fuga)

[15] Itbayat という名称は、現地のイトバヤット島の人達は、Ichbayat と言っている。また、ヤミの人達は、Ikbalat と呼んでいる。これは、西＝avayat、avalat から出来ていて、イヴァタン式にこの名前を書き換えると i-sa-avayat となる。(これは、Bureau (1903) の記録に見られる) しかし、これを古い形に再構成すると後述の t から s への変化で、古い形は i-ta-avalat となる。そして、何らかの音規則 (異化か弱化) で i-t(ə)-valat になり、イヴァタン語の方では変化して Itbayat になった。ところがイトバヤット語とヤミ語では、Itvalat が Ikvalat に変化し (t-k の変化の規則性は明らかではなく、確証はないが、Ivt. : d-in-iyat、kaddiny、mapteng、Yami : z-om-iyak、kagling、makchin (「酔った」、「山羊」、「空腹」などの変化が見られ、歯茎破裂音と軟口蓋破裂音の交替もないわけではない。) そして、イトバヤット語では、k が i の後に来ると ch になるという規則から Ichbayat になったと考えられる。

[16] 7というのは、この島は、一回行くと海が荒れているから7日間滞在するとか、7つの部分に分かれるとか言っていて、良くわからない。

[17] Ivana ← Ivanoa

[18] Babuyan 語の中には二つの方言があり、また、イヴァタン語での方言も同じ変化がある。di ~ dyi [dʒi]

[19] Babuyan Claro は、Claro Babuyan とか Kurug a Babuyan (本当のバブヤン) という名前がある。

これらの地名の中で現代語のイヴァタン語での解釈が出来ない地名がある。Ivatan と Vasay である。

この町または島の名前は、色々ある。フィリピン側では Basco、Vasay、Ivatan、Bashee、台湾側では、Votol/Fotol、Votol、地図では Bottol、Botel である。かっては、Bashee は、砂糖黍から作られる "basi" であるとか、Vasay は、鉄の斧である "wasai" から来ているといわれているし、Votol は、アミ語などの睾丸から来ていると説明されているが、それらは、もうひとつ説得力がない[20]。

そこで、この意味不明の地名を取り上げてそれらについて考察する必要がある。それらの地名は、

Votol、Botel、Bottol

Vatan

Vasay

Bashee

である。ここで一つの可能性を考えてみる必要がある。それは、これらすべての名称が一つのものから始まり、それぞれ取り入れられた、または、記録された最初の時代が別々でそれらすべてが固有名詞として現在まで踏襲されているというものである。すなわち、これらの地名の間に歴史的変化を追求するということである。

上記の地名を分類すると大きく3種類の分けられる。

Votol、Votel、Botel、Botol

Bashee、Vasay

Vatan (Ivatan)

まず、Bashee と Vasay を比べてみると、後者が前者から Bashee は Vasiy または Vasey と置き換えても問題はないと考えられる。ということは、

vasiy/vasey → vasay

という流れになる。次に、votol/votel と vasiy/vasey との関係を考えてみる必要がある。

votol/votel

vosiy/vasey

すなわち、語頭の V と語中の e/i は、変化がないとすると語中の a:o、t:s、語末の l:y にな

[20] 馬淵先生は、酒が入り、興が乗るとこの Votol の話になると必ず「狸の睾丸 80 畳敷き」といってその関係を説明されていた。

んらかの規則性が見いだせなければならない。

lからyへの変化であるがこれは、ヤミ語と他のこのグループに属する言語では、対応がある。たとえば、

ヤミ語	他の言語	
tatala	tataya	“ボート”
rala	raya	“血”
kamala	kamaya	“毛柿”
lamit	yamit	“陰毛”

である。ところが、問題になるのは、この変化は、ふたつのaという母音の間に来ている場合にだけ多くの変化が認められる。しかし、語頭でもないわけではない[21]。もし、語末であるならばイヴァタン語のyは、ヤミ語でもyなので問題が生じてくる。lがyの変わるもののオーストロネシア祖語（PAN）は、Rである。この音は、この環境以外にはこのグループすべてでyに変化してしまっている。

祖語	：*timoR（南西モンスーン（雨をもたらす））
ﾀｶﾞﾛｸﾞ語	：timog（南、南風）
ｾﾌﾞｱﾉ語	：timog（南西風）
ｲｳﾞｧﾀﾝ語（Vasay）、ｲﾄﾊﾞﾔｯﾄ語	：timoy（雨）
ヤミ語、ｲｳﾞｧﾀﾝ語（Isamorong）	：chimoy（雨）

そこで、ひとつの解決法は、二つのaという母音にはさまれた形を考えることである。

ところで、場所を示す接尾辞にanというものがある。それがついた場合にはこの規則が当てはまる。

[21] しかし、似たような形で別の変化をするものがある。

ヤミ語	lamit	yamot
イヴァタン語	yamit	yamot

後者は、明らかに祖語の形は、*Ramotでこの*Rは、母音間ではヤミ語では1になるものであるが、前者は、今の所明白ではない。しかし、malamit、mayamotという可能性もある。

votelan

vasayan

この考え方は、語頭の場合も「たくさんある」という意味の“ma”という接頭辞が付いて、二つの母音の間で残り、その接頭辞が無くなった形が残っている可能性が高い。また、この祖語の反映、特に語末を見ると台湾側の言語ではrやlで出て来る場合がある。これらのことから、R―l―yという変化は、考えられる。

一方、語中のtからsへの変化である。フィリピンの中でもイバナグ語では、

イバナグ語	イヴァタン語		PAN
itte	asa	“1”	*’ut’a’
futad	pusəd	“臍”	*put’əg’

となり、tからsへの変化も可能性がある。

以上のことから、母音のoからaへの変化は置いておいて、vase/iyは、va/otilへと遡ることが出来る。

ここで、次に問題になるのが、対応関係である。この変化は、フィリピン地域を飛び越して、すべてオーストロネシア祖語との直接の関係である。ただ、このような関係を無視することは、出来ない。すなわち、後述する「小便」は、漁師用語として“peteg”があるが、これは、「へそ」の古い形とおなじで、隠語としてそのまま残り、「臍」そのものはpusedに変化したと考えられる。いずれにせよ、この地域のことばの形は、PANと直接対応しているものが多い。

ここで、これらの地名に共通する基の形を考えると

va/otiR　ba/otil

という形が推定できる。これとPANの*bu[t]iḷ=seed、kernelと何らかの関係についてあるのではないか思われる。ただ、問題になるのは、Rとḷ問題と母音の関係である[22]。これは将来の問題となる。

[22] 語末のḷは、Rとなる場合もあるかもしれない。Dahl（1976）

このような解釈が正しいとすると、Votel、Vasayのもともとの意味は、「センター」、「核」という意味になり、いわゆるフィリピンでよくつかうセントロ、すなわち、この地域のセンターといういう意味になり、バシイック文化圏の中心になる。そして、この村を中心にすべての地名が決まっているのである。

そこで、歴史的な変化と各地名を図式化すると以下のようになる。

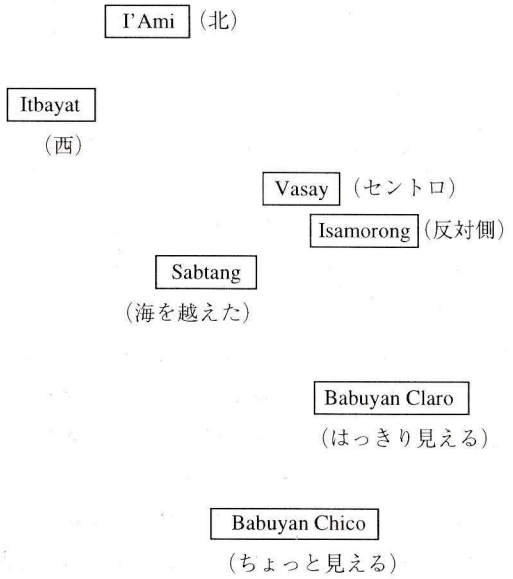
*butiḷ → vute/il → Vasi/ey → Vasay
*bu/atiR ↘ (Vatan)　↘ Bashee

ところで、上記の島々の中で、人が住んでいて村また町の形態があるのは、I'Ami、Itbayat、Batanes、Sabtang、Babuyan Claro、Babuyan Chico位で、それらの島々は、島自体の形状ではなく中心からの方角または、距離で名が付けられている。その他の島々は、舟で通ったり、短期的に居住することはあるが、出作り小屋の形式のものしかない。その理由は、三つある。第一は、海岸線の問題で、良い港がないということである。第二には、耕作用の広い土地がないということ、第三は、飲料水が手に入らないといことである。また、人が居住しているといってもこの三つが満足されているわけではない。たとえば、イトバヤットは、良港はなく、断崖絶壁を舟をロープで引き上げなければならないし、大きな泉は島のはずれに数カ所しかなく、現在では水道設備整っているがが、かつては飲み水に雨水を利用していた。しかし、島の上に行くとテーブル状の平地が広がり、耕作は出来る。一方、Babuyan Claroは、良港はなく、耕作地も非常に少ないが、多量の泉からの水があるし、その背後にはうっそうとした森がひかえている。それゆえ、I'Hami/I'Amiを除いたイトバヤットの北の島々では、この三つのものがなく、現在でも漁師と椰子蟹や薬草取りの人が短期間に行くだけで、かってフィリピン側の一番北の島のMavulis（フィリピンの一番北の島）で牛を飼おうとしたが、全く水がないためにすべて死んでしまった。そのために、水がほとんどいらない山羊だけがそれらの島々で家畜として残っているのである。そのような観点からするとこの地域で居住可能な島は、I'Hami/I'Amiだけに限られてしまう。

このような状態の国境地帯の島々の中で一番裕福なのがI'Amiであろう。良港に恵まれ、耕作地があり、水が豊富で、人口もさほど多くない島なのである。しかし、ここで問題なのがその海の中での位置である。この地域の海流は、いわゆる黒潮であり、バタン島とサ

ブタン島の間を通り、イトバヤットをはさみ、3ノットほどの速度で北へ大きな海の河となって流れている。昔は、4～50人乗りの舟でマニラなどに航海していたと言うが、そのような舟でも、北へ向かうのは、まあまあ行くことが出来るが、手漕のカヌーで反流を探してもどってくるのは至難のわざであるし、裕福な島から出て、かって迫害された異教徒の島々に戻る気にはならないと考えられる。

そこで、居住している島々の名前、町の名前を語源と併せて地図上に置いてみると非常におもしろいことがわかる。



この図からすべての中心は、Vasayという町にあることがわかる。すなわち、バシー海峡の中心地は、Vasay、今のBascoでその意味は、現代的な言い方をすればセントロであることがわかる。

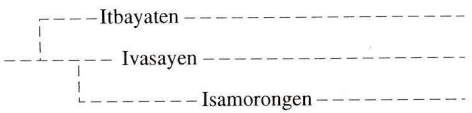
この文化圏の中での移動は、すべてカヌーで行われていた。また、バブヤンやヤミの島で人達は、どこから来たかははっきりしないが、別の島から移住してきたという伝説がある。これら以外の現在でも人が住んでいる島に関しては、スペイン人到着時には住んでいたことが記録されているということは、この2つの島以外から移って来たと考えられる。

Ⅵ.バタネス原住民の反乱とその後

スペイン側のかつての資料からするとバタン諸島の食料状態は悪く、特に台風の後では、ほとんど食べ物が無いという報告が諸処に見られる。とはいえ、島民全体を完全に葬り去るような飢饉は無かったように思われる。確かに、この文化圏に属する人達はカヌーでお互いに行き来していた。しかし、新しい村が出来上がるほどの大移動は行うとは思えない。多分、何らかの事件が起きて、やむなく故郷を離れなければいけなかったと考えられる。

バタネスの歴史は、記録されているのはスペインの来比からであり、その中で大々的な反乱が一回だけ起こっている。スペインの資料によると“Pagan”「異教徒」の反乱がサブタン島のマラクダンで蜂起した。1791年9月12日のことであった。この反乱を指揮したのはAman Dagatであった。最終的には鎮圧され、首謀者は首つりになった。この反乱によりスペイン人統治者は、中心地であるバサイから遠く海を隔てたイヴゥホスとサブタン両島のすべての島民をバタン島へ強制移住させ、故郷のサブタン島に住むことを許可しなかった。しばらくして、統治者は、移住させた人達の故郷への帰還を許した。このような状態で、キリスト教への反感を持ち、また、海洋民族として移動が簡単に出来たために多くの人達は、スペイン人達の軛からのがれ新世界に旅立つ人達もいたと考えられる。この話は、この反乱だけではなく、数多くの人々がサブタンを離れて行ったという話がサブタンの老人達の間で今でも語り継がれている。ただ、出ていった人達がどこに到着したかは明らかではない。

この移動の話は、この他の記録はまるでないために、歴史的には類推の域をでない。ところで、一つだけそのような過去の出来事を追求する事が出来る。比較言語学である。人々の頭の中からすべての記憶が消え去った後でも、ことばは、完全に消え去ったり、変化するものではなく、ある程度までは、過去を再構成することが可能である。過去の研究者たちは、ヤミ語と南のイヴァタン語、イトバヤット語との関係について綿密に比較を行い、これらすべての言語が同一のグループに属することを否定する人はもはやいない。このグループ内での相関関係は、Moriguchi(1983)で論じている。それは以下のようなものである。



これらの大きなグループと移住して来た人達のと考えられるバブヤン語とヤミ語との関係である。

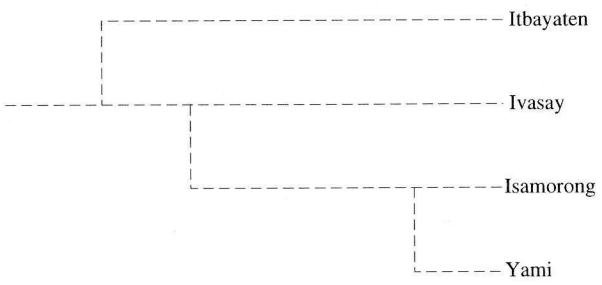
一番、注目することは、どの言語に古い形態と考えられるものがあるかということである。

Ivasayen	Isamorongen	Itbayaten	Yami	Proto	
hanyit	hanyit	xanyit	Gangit	*langit	「空、天」
raya	raya	raya	rala	*[dD]aRa（q）	「血」
tadinya	tadinya	talinya	talinga	*talinga	「耳」
dichud	dichud	dichud	likud	*likud	「背」

上の表を見ると、イトバヤット語とヤミ語が古い形を残している。ただ、古い形を残しているからと言ってその地域が何らかの関係にあったわけではなく、方言周圏論から言うと古いものは一番中心から離れた地域に残っているだけだとも考えられる。そこで、共通の変化がないか追求する必要がある。共通のものは、以下のものである。

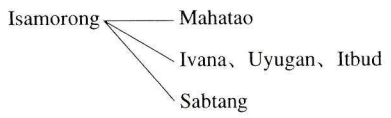
Ivasayen	Isamorongen	Itbayaten	Yami	Proto	
tinayi	chinayi	tinayi	chinayi	*tinaqi	「内臓」
dino	jino	dino	jino	*d-inu	「どこ」
chidat	chidat	chilat	chilat	*kilat	「稲光」

ヤミ語は古い形を数多く残していながら、イサモロンと共通の部分が多数ある。その結果からヤミ語とイサモロン語（方言）が密接な関係にあることがわかる。イサモロン方言とヤミ語が同一のグループに属し、他の言語、方言と対立している。すなわち、ヴァサイ方言とイトバヤット語とイサモロン方言グループで、その中にヤミ語があるというというグループ分けが出来る。すなわち、以下のような系統図になる。



このことを裏付けるのは、蘭嶼の人達の南の知識の中で地名である。彼等が知識として知っているには、Ivana と Ikblat（Itbayat）だけで、その他の地名は全くといって出て来ない。特に Ivana という名前は、かつてのバタン島の原住民は、Ivanoa と言っていて、スペイン人が聞き間違いをしてそれ以来 Ivana になったのであってスペイン侵入以前には存在しなかった名前である。ということで、I'Ami の人達の多くは、スペインの侵入以後に移動したのは明らかである。

ここで、一応、ヤミ語がイサモロン方言と近い関係にあることがわかったが、イサモロン方言と言ってもイヴァタン語の南方言全部を指し、その中でどの村と近い関係があるかという事を知りたくなる。この南方言は、大きく以下のように3つの下位方言に分かれる。



ヤミ語の中でもいくつかの方言に分かれるので一概にすべてとの関係が言えるわけではなく、伝説でも異なった時期に渡ってきたという事が明らかである。しかし、共通の部分だけを考えることにする。

南方言のサブタン方言は、イヴァナやマハタオなどの村のことばと、発音的には同じであるが、それぞれの村独特の特異な単語を使っているために、中心であるヴァサイやマハタオの人達から時々笑いものにされることがある。その中で一番特異なのがサブタン島の人々である。特にこの村の人達は、島からはるか離れて漁をすることは有名で、また、航海中使う単語は、陸上で使う単語とは違っている。この種類のある単語の存在によりどの

村からの人達が中心になって来たかがわかる場合がある。バブヤン島である。ここも、ヤミ語と同じように南方言の特徴を有している。

Babuyan	Ivasayen	Isamorongen	Itbayaten	Yami	Proto	
chinayi	tiayi	chinayi	tinayi	chinayi	*tinaqi	「内臓」
jiya	diya	jiya	diya	jiya	*d-iya	「ここ」

ところが、この方言でしか見られない単語がある。それは、「おいしい」「良い」という意味を表す単語で、サブタン語とバブヤン語以外は、

masdep：Ivasay、Isamorong;　　maslep：Yami、Itbayat　「おいしい」
mapiya：すべての言語、方言　　「良い」
mav:id：Ivasay、Isamorong;　　ma:vij：Itbayat　「美しい」
（ヤミ語は、piya「おいしい」「良い」、rakoyob、pengkad「美しい」）

であるのに、バブヤンでは、この3つまとめて“maganay”という単語を使っている。所で上の表では、そのような単語は見い出せないが、サブタン島の漁師は、masdep、mapiya という単語は、陸上では使っているが、一旦漁に出ると「おいしい」ということをそれらの単語を使わず、“maganay”といっている。その単語がバブヤンで使われ、他の2単語が見いだせないということは、バブヤン島の人達は、言語的にはサブタン島からの人達が中心になっていたことがわかる。一方、ヤミの方はどうであろうか。彼等の言霊信仰、また、言葉忌みは調査者がすぐ気がつくことで、死んだ人の名前や汚いもの、性的なものは、直接その単語を使うことを極力嫌う。この言葉忌みの結果他のヴァサイック文化圏の人とは違う単語を使っている。

Yami 語

maganinam（Imr）/maginam（Irrl）	「甘い」	
obot	「糞」	（mohbot）
tachi	「小便」	（糞）

ヤミ語では、甘いという単語が他の言語の“maonas”とは違う。確かに、すべての言語で「砂糖黍」は、“onas” であり、この単語を「甘い」いうものに使っているが、ヤミ語だけは“maganinam”、“maginam”を使っている。この単語と“maganay”を結びつけること強引すぎることであろうか。

一方、ヴァサイとイサモロンで共通する「小便」の男（m）と女（f）の違いは、イトバヤット、バブヤン、ヤミでは一つの単語しかない。

Yami	Itbayat	Vasay	Isamorongen	Sabtang	Babuyan
tachi					
	opis	opis (f)	opis (f)		
		pətəg (m)	pətəg (m)	pətəg	pətəg
				/makaotod	

のようになり、元々 opis があって、なんらかの理由で（多分、漁師言葉かもしれない）男子用のものを作りだし、使い、後にバブヤンで男の名称だけ残ったと考えられる。

ヤミの方の“obot”は、他の言語では、「外へ出かける」、「海岸に（料理用の海水を汲みに）行く」[23]ということである。これは、現地に生活してみるとすぐにわかることで、ヤミの人達は、夜遅くか、朝早く、引き潮になった海岸で大便をするのである。山に入ったときにはわからないが、毎朝の行事として海岸に出かけ太陽が上がるの見ながら用を足すのである。そして、もともとは、小便の方は opis か pətəg であったのが、忌み語であったために tachi（もともとは「糞」）に取って変わられたと考えらる。同じ様なことがサブタン方言にもあり、女性用の opis はそのままであるが男性用の pətəg の変わりに makaotod を使う。これは、もともとの意味は、「膝」（動詞で、直訳すると“膝する”）という意味である。

ところで、pətəg とはどういう意味なのであろうか。前述の比較の中に出てきた「臍」である。この単語は、現代でのこの地域の言葉では、posəd/pəsəd である。ところがこれを祖語に遡ると *put'əg' になる。このことから普通名詞の「臍」は潤沢な音変化して pused に

[23] 料理味付け用の海水

なったが、隠語（漁師用語）の方は、小便をかっては「臍」で置き換えていたが、それが、そのままの形で現在に引き継がれて来たと考えられる。また、サブタンでは、下の「膝」を小便として使っている。そして、ヤミでは別の形で漁師用語が出来上がったのかもしれない。

以上のことからヤミの言語活動やその単語の共通性から中心のグループは、サブタン島から移住して行ったと考えらる。

Ⅶ. まとめ

鳥居龍蔵の「ヤミ族」という名称は、明らかに部族全体を示すものではなく、ヴァサイ族または、イヴァタン族の中の北島／北村ということになる。それぞれをイトバヤット、イヴァサイ、イサモロンという村、フィリピン風に言えばバリオなのである。ヴァサイ＝セントロを中心とした文化圏の、一つの言語を使うグループの一番北に位置する島なのである。鳥居龍蔵が調査した時に、蘭嶼の人々が“Yami kami.”、“I'Ami kami.”と言うのは、イトバヤットの人が“Ichbayat chami.”とか、“Itbayat kami.”と答える、バタン出身の人が、“Ivatan kami.”というのと同じである。そして、「我々のは、イモロッド。」という答えは、“Imorod namen.”で返事をしても何もおかしいことはない。

また、ヤミという名称が昔から使われていたが、絶えず論争の的となっていたのは、その名称と地図上の島の名前が一致しなかったために起こったことである。前述のように、イトバヤット島から北へは、余程の覚悟と必要性がなければ行けないところで、スペイン人達はそれを正確に調べないで、ヴァサイ（バスコ）あたりから見える島の名前を調べそれに基づいて現在見られる地図が出来上がった。そのことは、島の名前のずれからはっきりとわかることである。国際線を飛ばしているフィリピンの国営的な飛行機会社でさえ、自分の所から出版している飛行機内で無料で配っている雑誌には、バタン島から北は欠けていて、バタン島から北はフィリピンになっていないのである[24]。そのような所であるから未だ島の名前の訂正は、行われておらず、それは現地の人達の名称を完全に無視した結果である。Botel Tobago という名前は、ヨーロッパ人がつけた名前であり、地図上で、それらと現地名が混ぜて使われたために起った混乱なのである。

結論としては、鳥居の記録は正しかったし、蘭嶼に居住する人達は、ヤミであった。し

[24] ある研究者の指摘により現在は、訂正されている。

かし、そうだと言ってもそれをヤミ族として取り上げることは出来ない。あくまでもIvatan族またはIvasay族のヤミ島（北島、北村）居住者なのである。そして、そこへ主に行き来したのは、イサモロンのサブタン出身者たちで、多分、村全体の大移動的なものは、その原因がサブタンでの原住民蜂起であろうと考えられる。

＊この論文は、文部省科学研究費補助金による台湾およびフィリピンの海外学術調査（1985, 86年度：(60041013)、1987, 88年度：(63043012)）、国際学術研究（1990, 91年度：02041019)、1993, 94年度(05041005)）（以上代表者　東京大学　土田滋教授)、国際学術研究（1996, 97年度)：(08041013)）（代表者　静岡大学　森口恒一）の結果を総合的にまとめたものである。調査中は、蘭嶼、バブヤン、バタネス、イトバヤットの方々にお世話になった。一人一人のお名前はここではあげることが出来ないが、それぞれの科学研究費補助金報告書に記載してある。

文献

安倍明義

1938　『臺灣地名研究』 396+22pp.、蕃語研究会：　臺北

Asai Erin

1936　*A Study of the Yami Language : An Indonesian Language Spoken on Botel Tobago Island.* 95pp., Universiteisboek-handel en Antiquariaat J. Ginsberg : Leiden

Benedek, Dezso

1987　*A Comparative Study of the Bashiic Cultures of Irala, Ivatan and Itbayat.* Ph.D. Dossertation at the Pennsylvania State Universtiy.

1991　*The Songs of Ancestors : A Comparative Study of Bashiic Folklore.* SMC Publishing Inc. : Taipei

Blair, E. Helen & James A. Robertson

1951　*The Philippine Islands 1493-1898.* The A.H. Clark Co. :Cleveland.

Buzeta, Fr. Manuel & Fr. Felipe Bravo

1850　*Diccionario Geografico, Estadistico, Historico de los Islas Filipinas.* : Madrid

Blumentritt, Ferdinand

1898　"Der Batan Archipel und die Babuyanen-Inseln." Mittheilungen der k. u. k. Geographischen Gesellschaft.41: 593-606.

Bureau of Census & Statistics

1903　*Census of the Philippine Islands.* Department of Commerce & Industry, R.O.P. : Manila.

Dahl, Otto Chr.

1976　*Proto-Austronesian.* Scandinavian Institute of Asain Studies Monograph Series. No.15.

Curzon Press : Lund.

1981　*Early Phonetic and Phonemic Changes in Austronesian. universitetsforlaget* : Oslo.

Dampier, William

1697　*A New Voyage around the World.* Vol. 1 & 2. James Knapton: London. Also in Blair & Robertson: Vol.38 & 39.

Dominicos Missioneros

1914　*Diccionario Espanol-Ibatan porvarios P.P. Dominicanos.* Tipografia de Sto. Tomas. : Manila.

1933　*Vocabulario Ibatan-Espanol o sea del dialecto hablado por los naturales de las islas Batanes y Calayan.* Imprenta de la Univ. de Sto. Tomas.

Gonzales, P. Julio,　O.P.

1966　*The Batanes Islands.* Univ. of Santo Tomas Press. : Manila

Hidalogo, Cesar & A.C. Hidalgo

1971　*A Tagmemic Grammar of Ivatan.* Linguistics Society of thePhilippines. : Manila

Idigoras, Anastasio P. Fr.

1896　"Las Islas Batanes." in *La Politica de España en Fillipinas.* Vol. VI. No. 138-142.: Madrid

鹿野忠雄

1946「紅頭嶼とバタン諸島の交渉とその杜絶」『東南亜細亜民族学先史学研究』 1：　35-55

馬淵東一

1954「高砂族の移動および分布」『民族学研究』第18巻4号（馬淵東一著作集　第二巻 pp. 347-460.

Moriguchi Tsunekazu

1980　"The Yami Language."『黒潮の民族・文化・言語』角川書店 308-386. ：東京

1983　"A Preliminary Report on Ivatan Dialects." *Batan Island and Northern Luzon.* 205-253. Uniersity of Kumamoto : Kumamoto.

村上直次郎　（中村孝志）

1972　『バタヴィア城日誌　2』　東洋文庫 205. 平凡社：東京

Reid, Lawrence A.

1966　*An Ivatan Syntax.* Oceanic Linguistics Special Publication No. 2. University of Hawaii. 160pp.

Scheerer, Otto

1906　"Zur Ethnologie der Inselkette zwischen Luzon und Formosa." *Mitteilungen der Deutschen Geselschaft für Natur- und Volkerkunde.* XI-1 1-31. : Tokyo.

1908　"The Batan dialect as a member of the Philippine group of languages." *Division of*

Ethnology Publications. 5-1 1-131.

鳥居龍蔵

1897　「臺灣通信　紅頭嶼行」『地理学雑誌』9-107 ：

1898a　「紅頭嶼通信」『地理学雑誌』10-109 ： 2-34

1898b　「台湾人類学調査略報告」『東京人類学雑誌』13-144 ： 225-230

1899　『人類学写真集　臺灣紅頭嶼之部』 東京帝国大学理科大学

1902　『紅頭嶼土俗調査報告』 東京帝国大学

Tsuchida, Shigeru, Y. Yamada & T. Moriguchi

1987　*Lists of Selected Words of Batanic Languages*. University of Tokyo. 198pp. : Tokyo.

Tsuchida, Shigeru, E. Constsntino, Y. Yamada & T. Moriguchi

1989　*Batanic Languages: Lists of Sentences for Grammatical Features*. University of Tokyo. 227pp. : Tokyo

移川子之蔵

1931　「紅頭嶼ヤミ族と南方に列なる比律賓バタンの島々。口碑傳承と事實。」『南方土族』 1-1. 15-38.

Yamada, Yukihiro

1967　"Fishing economy of the Itbayat, Batanes, Philippineswith special reference to its vocabulary." *Asian Studies* 5-1. 137-219

1976　*A Peliminary Dictionary of Itbayaten*. 2+400+4 pp. : Kochi. MS.

1981　*An English-Itbayaten Dictionary*. 2+197pp. : Kochi. MS.

1996　*A Bibliograhy of the Bashiic Languages and Cultures*.70 pp. : Himeji. MS.

台湾原住民研究第３号
1998年12月20日

台湾アミ族の空間認識

原　英子

はじめに

台湾アミ族には、空間と性を結びつける思考がみられる。本稿では台湾アミ族がどのように空間を分割し、それを象徴的に性と結びつけているのか、それらの関係を明らかにすることを試みる。

アミ族の空間が性と深い関係をもつことに最初に注目したのは、1930年代に、南勢アミの村落で調査をおこなった古野清人である。古野は、南勢アミの家屋の四角（よすみ）には、それぞれパイシンpa-isin（禁忌）があり、男性が祭祀に用いる祭器デワスと女性が祭祀に用いる祭器チュウカンが特定の場所に置かれ、「聖なる方位」と性が関係していることを指摘している（古野 1990:98-101）。1968年には、常見純一によって古野の隣村が調査された。常見により家屋内の四角だけでなく、家屋内での生活空間全体が、男女の性によって活動区域が規制されていること、その規制は方位と関わり合っていることが指摘された。さらに男性は裏、不浄、狩猟・漁撈と、女性は表、浄、農耕・家畜飼育と結びついて双分構造をなしているという（常見 1973）。また山路勝彦によりアミ族では、男女の性による規制が、生業面においても働いていることが指摘されている。それによると生業面において、男性は漁撈に携わり、魚を家の外で調理し、そこで食する。これに対し女性は粟栽培に携わり、粟を家の中で調理し、ここで食する。さらに男性は野生動物の狩猟に携わり、女性は家畜の世話をおこなっている（Yamaji　1990:49-75）。ここには男性＝漁撈・狩猟＝家の外に対し、女性＝粟農耕・家畜の世話＝家の中という関係がみられる。

アミ族の空間区分と性との結びつきの関係は、古野や常見にみるように方位と結びついているものと、山路の指摘にみるように活動領域と結びついているものと、２つの異なる